1；at first

都心ではこどもの姿をあまり見ることができない。「都心居住」という言葉を示し、今東京はマンション建物上層にあるので、である。

都心は車・住・遊が共存しているという点で住まい手満足する一方、何時間もかけて通勤し、治安の悪さや子育ての難点を理由のため郊外に住宅を持ち帰っている人が多い。

大人家の都合で子どもを育てにくい環境で育てるか、子どもを取って通勤通学に時間と努力をかけるか･･･？

ならば都心に子どもを育てやすい場所を作ればどうか。そしてその場所が都心の「こどものための住宅」、で終わりではなく街、都心に働きかける場所であったろうだろうか。

2；site

場所は地図での近く、南麻布を選んだ。

南麻布は、渋谷や六本木などに挟まれており、周辺が商業、とともに流動的であるのに対して、今までほとんど開発されず自然のように取り残された地域である。

そのほとんどが住宅地が占めているが、それら地域の中心にあるもの、まちの中心に位置する有場川宮記念公園である。

この公園では、平日の昼から夕方まで、子どもを連れた家族、犬を連れた人･･･などであられ、休日ともなると都心から車でわずか公園に遊びに来る人もいる。また、外国人の多く住む街であることからさまざまな文化が広がれている。これらのことにより、人々が公園に集まる時間帯の前から公園まで通るのには賑わいある。

敷地は、その南側、昨年四月に移転した自治大学校の跡地。

2003年度 芝浦工業大学 建築学科
卒業研究発表

K00092 深澤 ぐみこ

3；and...

集合住宅と保育施設、外に開かれた半外部空間である迎賓館、すべてを囲む一本の大きな木をイメージしたのを配置する。

それは、人工地盤により上部を人が自由に歩くことができ、集合住宅に住む者の共通の庭、コモンスペースともなる。また、人が一番多くなる場から特ににかけては、光が人工地盤のスリットを抜け、木々の間から「ここれい」と呼ばれる場に降りることができる。

住居部分は地下で保育施設もつながっていて、そこに住まう人々が保育施設に通い、まるで遊びあうお友だちのこどもを認証することを容易にし、同じ木に集まって住んでいる、という意識をより強くする。

そうすることで、集まって住むということがお友だちのこどもを通して人と人とのつながりに発展するのと同時に、こどもを毎日木の下に住む者で守り、育てていくという意識を持つようになる。

人々はいつものように公園に集まります。

近所の人はもちろん、わざと車で来た人もいます。

みんな思い思いのことをして、時間を過ごしていました。

周りを歩く人は、お店に立ち寄るか、公園に向かうか･･･。

そんな公園に集まる人々がある日見つけます。

「あの木は何？」

ある日突然公園の「外」にある空間に気付く。

そして･･･